

ハットン シンポジウム特集号によせて

中島 隆¹⁾・石原 舜三²⁾

ハットン シンポジウムは、花崗岩研究の学術的なレベルを引き上げることが目的として4年に一度開かれる国際シンポジウムである。1987年に第1回大会がイギリスのエディンバラで開かれて以来、オリンピックのように4年毎に違う国で開催されてきた。その第5回大会が2003年9月2-6日、日本の愛知県豊橋市で開催された。アジアで初めての開催となったこの大会には、地球上のすべての大陸から200人を超える参加者が集まった。シンポジウムの実施には日本の花崗岩研究者たちが一致協力してあたり、大きな成果をあげて成功裏に終了した。本特集号では、この第5回ハットン シンポジウム日本大会を、その周辺の話題も含めて立体的に報告する。

本特集ではまず、ハットン シンポジウムとは何かを知ってもらうため、その由来と第1回大会から前回大会までの経過を、このシンポジウムに日本人としては一番多く参加している川野良信と中島が紹介する。

次に、第5回日本大会の詳細を3つの記事で報告する。それらは「第5回ハットン シンポジウム」(1)、(2)、(3)の連作の形で掲載されている。(1)ではこのシンポジウムの科学プログラム委員長として活躍した有馬 眞らによって、シンポジウムの学術的内容が紹介される。次いで(2)では、ハットン シンポジウムにおいて大きな比重を占める巡検について、各巡検コースの案内者からのレポートを、本大会の組織委員長であり、自らプレ巡検の案内者も務めた石原がとりまとめた。(3)は、ハットン シンポジウム日本大会に関する舞台裏の話、終始この大会の裏方方として準備と運営に携わった中島と石原が書きつづった顛末記である。

シンポジウムで実際に発表されたトピックの例と

して、笹田政克によって葛根田ほか地熱地帯で高温貫入岩体をボーリングで掘り抜いた報告が執筆された。初めて若い変動帯で開催されたハットン シンポジウムである日本大会で、その地域的特色を生かした発表として会場でも注目を集めたものである。

今大会を充実させたもう一つの要因は巡検であったが、その案内コースの対象地質に関連する解説記事を2編収録した。一つは中部地方領家帯に産する武節花崗岩、いわゆる岡崎みかげとよばれ石材としても名高い花崗岩について、この巡検を案内した仲井 豊と鈴木和博が解説したもの、もう一つはポスト巡検の舞台であった北海道日高帯で変成岩に伴って産するSタイプ花崗岩類について、このコースの案内者の1人であった志村俊昭が解説したものである。

花崗岩類は、苦鉄質包有物を密接に伴って産することがしばしばあり、最近これらの成因的な関係が花崗岩貫入過程を解明する鍵として注目されているが、その白黒があやなすさまざまな組織は被写体としても魅力的である。一方花崗岩は堆積岩類とも成因的な関係があることを露頭は語っている。本特集号では、今大会で実施された巡検の各コースから特によりすぐりの露頭写真を集めて、口絵ページを増設し誌上巡検の形にした。日高帯については、本編の紹介記事を書いた志村が記事と共に寄稿していただき見事な写真からなる口絵に活用させてもらった。

後世から見ると日本の花崗岩研究の節目にもなるであろうこの大会の、その時点での日本の花崗岩写真集として見ていただければ幸いである。

(以上、文中敬称略)

1) 産総研 地球科学情報研究部門
2) 産総研 特別顧問

キーワード: ハットン シンポジウム, 講演内容, 野外巡検, 葛根田
花崗岩, 岡崎みかげ, 日高帯のSタイプ